

中・近世のおゆみ野

小 高 春 雄

1 はじめに

おゆみ野（千葉東南部地区）は千葉市東南部に位置し、事業面積約6平方キロメートルと広大で、その範囲は海岸平野に面する台地上から山間部に及んでいる。昭和48年以来、工事に先立つ発掘調査が行われ、調査された遺跡数は39を数える。それも純農村地帯として手つかずの台地がのこされていた結果であろう。この点、千葉以北の都市部と大きく異なる点である。本稿は中・近世という時代ではあるが、逆に言えばそれゆえに考古学的手法によって語る該期の一つのモデルケースになるのではないかと考える。また、総括を通して残された問題点にもふれてみたい。

2 中・近世遺跡の立地

事業地内は海岸平野に流れ込む小河川沿いに形成された谷地とその間の開析の進んだ台地群によって構成される。谷は北側都川水系の仁戸名支谷、西側から南側の浜野川水系の赤塚支谷、泉支谷、金沢支谷に大別される。一方、台地は仁戸名谷を境に北側は平坦な台地が南側浜野川水系は丘陵性の台地となる。

調査された遺跡及び遺跡範囲・調査範囲は第1図に示したところで、一見してわかるとおりすべてを調査しているわけではない。とりわけ集落、台地斜面・谷間はまったく除外されている。モデルケースとはいってもそういう制約はあるという前提でこの立地も考えざるを得ない。

中世の遺跡は仁戸名支谷では確認されていないが、そもそも調査されているもので3遺跡のみであるから、断定は難しい。縄文土器から土師器片の散布が遺跡認定の決め手となることから、それらが希薄ないし確認できなかったというにすぎない。そういう意味では山林や集落内も同様であり、結果としてこの地域については考える素材に乏しいとみておきたい。

一方、赤塚・泉支谷では奥から有吉北貝塚、鎌取遺跡、有吉城跡と続いて検出されている。とりわけ赤塚

支谷では台地上はほとんどが調査対象となっており、大きく見逃している箇所はないといえる。一つ不可解なのは谷の先端に位置する城ノ台遺跡である。ここはその字名から城跡として考えられてきたところながら、台地上を広く確認した限りでは明確に城跡に伴う遺構は検出されず、遺物も銭貨程度である。いずれにしろ対岸の伯父名台のようなあり方にはならないだろう。

その東南の椎名支谷では谷の出入口に位置する伯父名台遺跡と椎名神社遺跡があげられるが、谷奥では検出例はない。谷奥の台地上は人形塚を始め、東南部地区では一番の古墳密集地であるが、それに対応する集落は椎名崎遺跡・伯父名台遺跡などの海岸平野沿いの遺跡群の可能性が高く、その関係は中世にも通じるものと思われる。

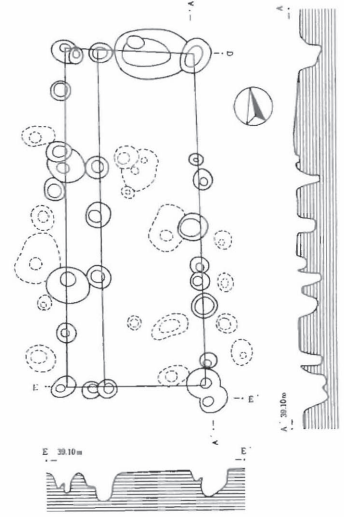
金沢支谷では検出例は富岡古墳群1か所¹⁾であるが、これは石塔のみしかも意図的に集めた状態で、本来の位置関係にはないが何れにせよ近辺に由来するものであろう。この金沢支谷も赤塚支谷と同様、一部を除いて調査の手が広く及んでいる。

そうすると、赤塚・泉支谷の出口付近と、それを遡った台地上に中世の遺跡が営まれたことになる。その延長上には戦国期の城跡である南小弓城が所在する。

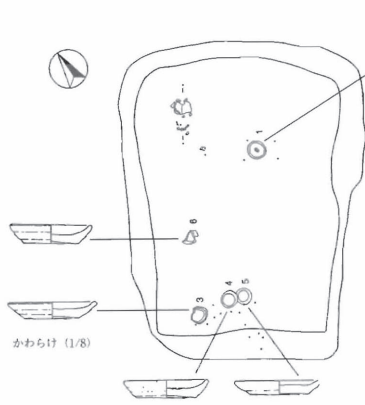
近世の遺跡は泉支谷に面する近世有吉集落の調査例がある他は、塚と溝跡、土手跡が主なものである。塚は群在例はなく、すべてが単独であり、見逃している例は少ないといえる。溝跡（土手・ピット列も含め）はほとんどの遺跡で多かれ少なかれ検出されている²⁾。しかし、検出例はあってもその全体像を把握できる類例に乏しく、しかも多くは付け足し的に説明されるのみで、その性格まで言及した例は希である。また、土坑、墓坑、炭窯の類は当地区ではその面積からすれば極めて少ないといえる。それ故、特徴的な遺構を中心として紹介することになる。なお、近世については塚は別途分離して説明することとするが、それは当



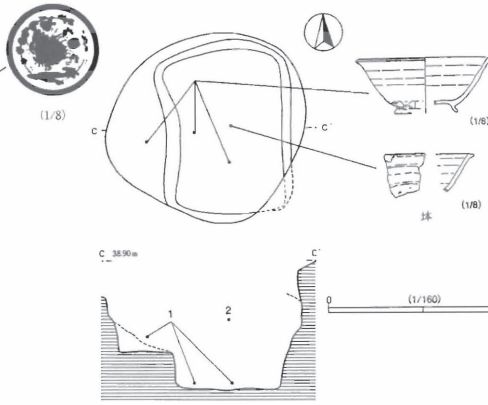
有吉北貝塚中・近世遺構群



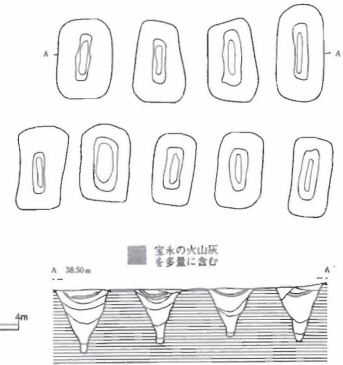
掘立柱建物跡 (SI001)



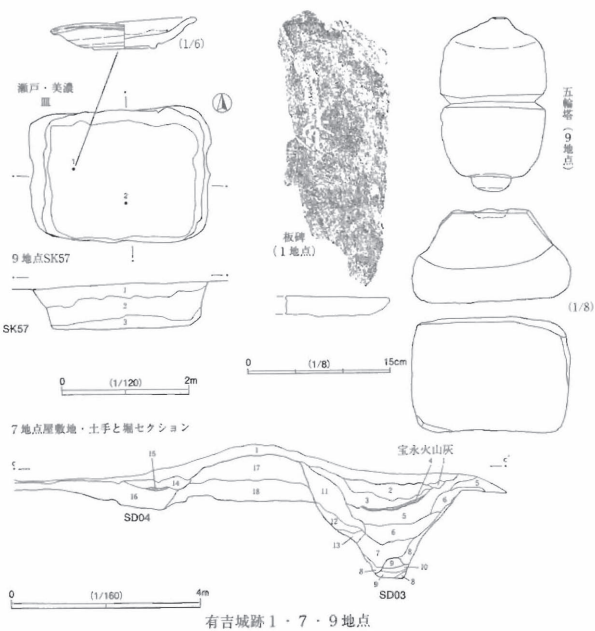
中世土墳墓 (SK181)



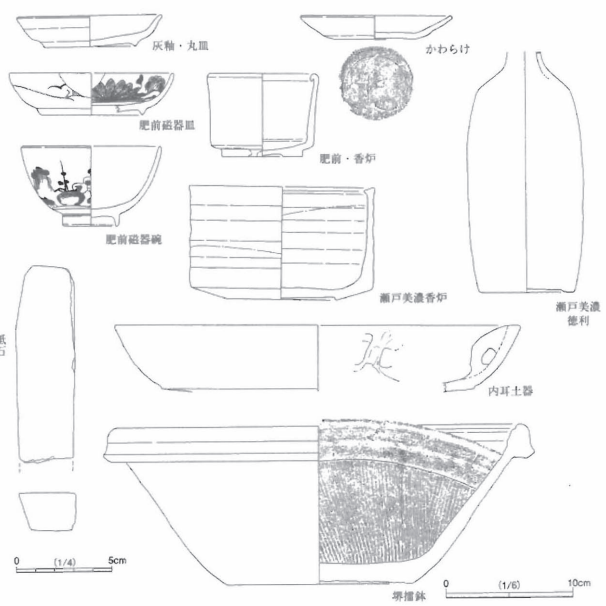
地下式掘 (SK621)



近世シシ穴 (SK649他)



有吉城跡 1・7・9地点



有吉城跡15地点出土遺物

第2図 有吉北貝塚・有吉城跡

掘していないためか、その内容は不明である。

【有吉城跡】⁶⁾

有吉北貝塚の南約350mに位置し、主に丘陵性の台地縁辺に広く調査の手が及んでいる。かつての有吉集落の跡地であり、報告では明確に中世に遡る遺構は指摘し得ないとする。

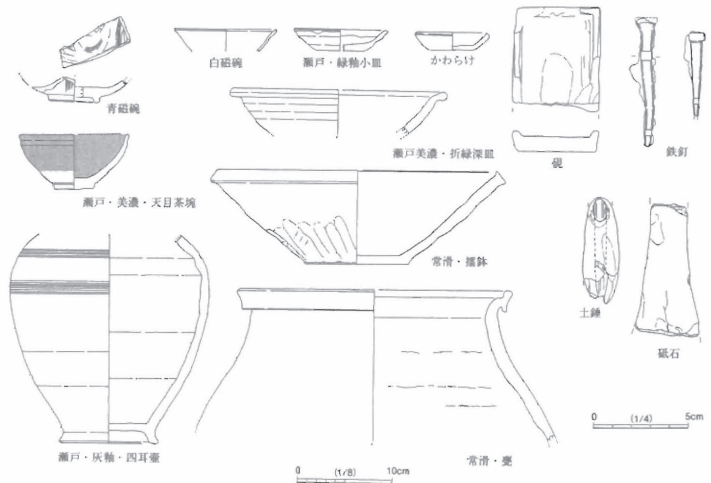
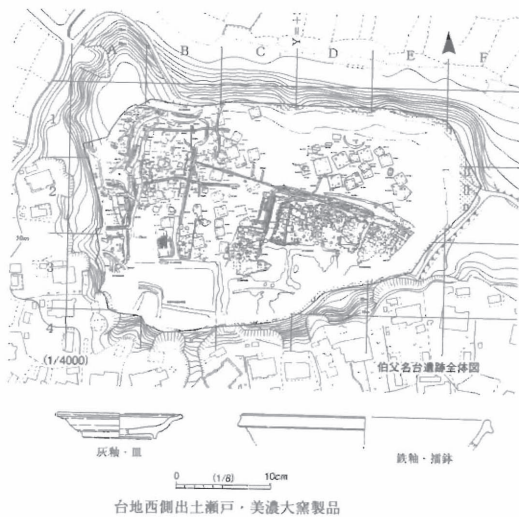
しかし、中世的火葬土坑(SK87)や15世紀代の陶器を伴う方形竪穴遺構(SK57)の検出、13世紀から16世紀代にわたる陶器片(約10数片)の出土、15世紀から16世紀代の板碑片・五輪塔各部(6点)、ほかに中世的な砥石など、旧有吉集落中心部に中世の遺構群が存在したとみる。一帯は有吉城跡として把握され、遺跡名もそれに由来するものであるが、土塁や溝はいずれも近世の所産であり、報告で結論付けているように中世城郭とは

考えられず、集落つまり小規模な村落、それも有吉北貝塚のあり方からすると、有吉北貝塚→有吉城跡という中世集落の移動があったかと想定される。

(2) 椎名支谷

【伯父名台遺跡】⁷⁾

海岸平野に面する台地南側から西側にかけて中世の遺構が密集する。その大枠は台地南半部「整形区画」群と溝囲みの台地西端部、及び堀跡に大別される。整形区画群は東西に長い長方形(30m~40m×20m程)であり、内部に掘立柱建物、竪穴遺構、地下式坑、大小のピット群等が密に分布する。特徴としては、大型で且つ深いタイプ(径3m前後で深さ1m前後)の竪穴がまとまってみられることと、この手の区画群にしては地下式坑が散発的なあり方を呈することである。



第3図 伯父名台遺跡・中世遺構群と出土遺物

西側縁の溝に区画された範囲は土坑、火葬土坑が分布し、墓域と考えられる。

堀跡は台地北西の突出部を区画するように設けられている。規模としては城郭としても遜色ない堀ながら（長さ17m×幅約5m×深さ2m）、その両端は掘り切らずに残しており、土塁も伴わない。しかし、その先の墓地の周囲は低い土手が廻っており、それに対応する堀の可能性もある。なお、堀自体はその底面にT字形の火葬土坑が存在するので、中世の所産である。

時期的には、12世紀から13世紀代の貿易陶磁や常滑製品から始まるものの、量的には14世紀から15世紀前半頃までの瀬戸・美濃製品が多く、整形区画群もそれに準じた年代が与えられよう。北西部の遺構、つまり堀跡及びその周辺ではT字形火葬土坑や、16世紀代の瀬戸・美濃大窯製品が出土していることからそれとは切り離して考えるべきかと思われる。

その性格としては当時の農民層の屋敷跡群と想定しておきたい。

【椎名神社遺跡】⁸⁾

伯父名台遺跡の尾根続き北側に位置する。狭い尾根幅の南側を区画するように溝が廻り、その南側の区画内縁に地下式坑が連続する。北側のピット列や掘立柱建物も中世に所属する可能性がある。細尾根のためか中世以前の遺構の残りも悪いので、整地面そのものが消滅したともとれるあり方である。

(3) 金沢支谷

【富岡古墳群】⁹⁾

金沢谷出口付近の南向き丘陵に営まれた古墳群の周溝付近から中世の石塔各部が集積された状態で出土した。その内訳は五輪塔・宝篋印塔各部、板碑片併せて約60点にのぼり、各部の最大個体数や遺存度を考慮すると、五輪塔が12個以上、宝篋印塔が3個（以上）、板碑が13個前後となり、東南部地区ではもちろん、周辺でもまとまった出土例といえる。時期的には、15世紀末から16世紀代に下るもので、小型の石塔や簡略化された製品が多量に出回る以降のものである。

その由来については不明ながら、長徳寺北西裏山という条件から本来は背後の斜面にあったものが、後に現地に移されたものと思われる。寛延4（1751）年絵図¹⁰⁾では長徳寺裏山一帯は山林となっている。なお、長徳寺自体は天台宗の古刹であり、天文14（1545）年追刻（「椎名富岡山長徳寺」）の梵鐘も現存する¹¹⁾。15世紀後半以降は台地平坦面で石塔の出土例に乏しい反面、時折山裾や路傍でこのような集積地をみかける。

集落近辺ないしその裏山斜面に墓所が営まれた反映であろうか。

4 各遺跡の概要—近世—

(1) 赤塚支谷

【高沢古墳群】¹²⁾

調査範囲は高沢古墳群として報告されているが、生浜古墳群や南二重堀遺跡とも接しており、丁度この接点で、溝底大型土坑列を伴う大小の溝が検出されている。大きな溝では溝底から2mの深さを有し、西側の土手との比高差は約4mに達する。地形図では堀と土手の凹凸が南側へ延びており、近世絵図（「有吉村北西部の絵図」）¹³⁾にもそれらしき線が描かれている。付属するように延びる溝からは中世内耳鍋と宋銭・明銭が出土している。そのことからすれば、中世の遺構であるが、この種遺構の明確な中世報告例に事欠く現状から、近世始めとしておく。なお、東側の遺跡名である二重堀とはこの遺構に由来するのであろう。害獣対処の堀（犬落穴か）としてよい。

【有吉城跡】

近世有吉集落の外縁部は第30次にわたる調査によって広くその様相が明らかになっている。寛永5（1628）年「下総国小弓郷領」¹⁴⁾には有吉村年貢として田方約156石、畑方41石の記載がある。また、天保13（1842）年の宗門改帳¹⁵⁾に拠れば35軒、人口は187人であった。

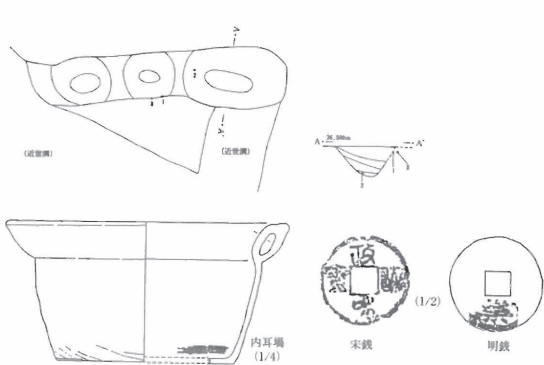
調査結果では、屋敷の段や建物跡、その廻りの土手、道跡、谷頭に設けられた獣除け溝、集落の檀那寺であった泉蔵寺に伴う塚や墓など、中世集落の発展形を窺うことが出来る。

【有吉北貝塚】¹⁶⁾

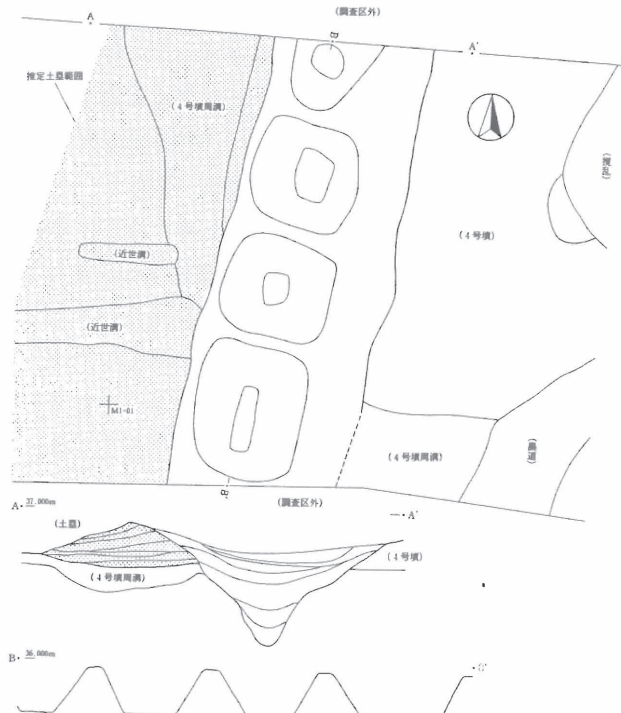
有吉集落から北方尾根沿いに約500m行ったところが字日照田の有吉北貝塚である。ここでは北東縁辺を区画するように溝が廻り、その中央に2列の深いシシ穴群が設けられている。土手については不明ながら西側に存在したと思われる。覆土上位に宝永火山灰が堆積していることから、17世紀代の所産としてよい。有吉村の新畑造成に伴うものであろうか。なお、浅い溝によって囲まれた中央の区画は出土遺物や明治10年の絵図¹⁷⁾から比較的新しい畑と考えられる。条件の悪い地では荒地と新畑が繰り返されたのであろう。

(2) 泉支谷

有吉集落は泉支谷にも面しているが、既に述べた。ここでは谷の最奥に当たる字馬ノ口・木戸作¹⁸⁾について考えてみたい。両者は有吉北・南両貝塚の北側に



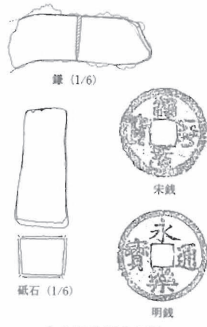
高沢古墳群2号溝状遺構と出土遺物



高沢古墳群1号溝状遺構



神明社裏遺跡遺構分布図



今台遺跡出土遺物



今台遺跡全体図



寛延4 (1751)年椎名上郷絵図高岡部分
(千葉市史 史料編4近世)



天保7 (1836)年椎名下郷見取絵図控今台付近
(絵にみる・図でよむ千葉市図誌上巻)

第4図 高沢古墳群・神明社裏遺跡・今台遺跡

確認され、共に馬それも牧に関わる可能性が高い。但し、牧といっても官牧ではなく強いていえば村の経営でその需要に応えるものではなかったかと推測する。但しそれも近世を通してということには疑問で、その名残が字名として残った結果ではなかろうか。

(3) 椎名支谷

【今台遺跡】¹⁹⁾

谷の最奥に位置する。ここでは台地の中央に50m×60mの長方形の溝囲みの区画が検出されている。溝は幅50cmから1.5m程ながら深さは最大で1m以上あり、断面はV字形をなす。区画と台地縁とは約30m前後離れているという特徴がある。その性格をどう理解するのだが、寛延4(1751)年大金沢絵図²⁰⁾を始め、近世絵図には台地の中央部を畑地として活用している箇所が多くみられることから、新畑に際し、道を兼ねた根切り溝ではないかと推測する。図示した天保7(1836)²¹⁾年絵図には区画溝は一部は道として残る反面、山上は広く畑地となっている。台畑の広がりともみるべきであろうか。

(4) 金沢支谷

金沢支谷は途中から分かれて北側を小金沢支谷、南側を大金沢支谷という。何れもその最奥では浅い溝が散在するといった状態なのに対し、集落に近いところでは比較的遺構の密度が濃い。後者を紹介する。

【ムコアラク遺跡】²²⁾

ムコアラク遺跡(1979報告分)ではその北側で台地を斜めに横切る幅広の溝(最大で約5m)が検出されている。断面は浅い鍋底状で、踏みしめられた痕跡がある。江戸中期の絵図(迅速図にもない)にはないので、それ以前の所産であろう。あるいは大膳野から六通を結ぶ古い道かもしれない。谷を上り下りする故に使われなくなったのであろうか。

なお、ムコアラクとは向新久で、新開地の向かいを指す。隣接する六通集落は北側の殿堀集落と共にかつては椎名上郷の秣場であったものが、延宝5(1677)年に新田集落として成立した²³⁾。その向かいと解されよう。

【御塚台遺跡】²⁴⁾

ムコアラク遺跡の西側対岸に位置する。半島状台地のネック部を溝底土坑列を有する溝(幅約3m、深さ1m弱)が切っている。ここは六通との地境に当たる場所で、江戸中期の絵図には小金沢集落から六通へ抜ける縦貫道が見えるので、それ以前の遺構であろう。近世始めにおける害獣対処の所産と思われ、火打金、

鉄鍋、中世播鉢などの出土はそれに対応するものであろうか。

【神明社裏遺跡】²⁵⁾

小金沢集落背後の台地である。ここは前掲寛延4年絵図に台畑と記されている通り、集落近辺の畑地であった。南側から上って台地を二分する道を境に南北二面に分かれ、この内、西側と北側縁辺部には明瞭な溝底土坑列を有する溝(幅約3m、土坑径1.5m・深さ0.5m前後)が廻っており、その内側にも並行するように溝が何条か認められる。集落近辺の畑は継続して維持されているので、当初は害獣への対処、以後は境界や根切り溝として掘り直された結果であろう。なお、その北側にも溝底土坑列を有する溝がみられる。畑地が続いていたのであろうか。

5 各遺跡の概要—近世塚—

東南部地区で確認された塚は14基であるが、この内12基が調査された。

馬ノ口遺跡²⁶⁾ 1基 径約20m×高さ約3m 3段築成、古墳再利用、石碑4、銭貨・馬具出土

高沢遺跡²⁷⁾ 1基 径20数m×高さ約2.5m 遺存不良、伴う遺構・遺物無し

高沢古墳群²⁸⁾ 2基 ①径約13m×高さ約2.5m 表土攪乱、銭貨2点出土 ②径6m×高さ1m 削平顕著 伴う遺構・遺物無し

御塚台遺跡²⁹⁾ 1基 径12m×高さ3.2m、3段築成、銭貨7点出土

城ノ台遺跡³⁰⁾ 1基 径15m×高さ3.5m 3段築成、石碑8

有吉城跡8地点³¹⁾ 2基 ①径17m×高さ3m、②径9m×高さ2m ①は3段築成・古墳再利用か、2は角錐状、隣接して立地、陶磁器・火打石出土

有吉城跡11地点³²⁾ 1基 径7m×約2m 表土攪乱 古墳再利用、石碑2、陶磁器、銭貨多量出土
椎名崎古墳群B支群³³⁾ 1基 径30m×高さ4m 無段、銭貨1出土

今台遺跡³⁴⁾ 1基 現存径5m×高さ0.5m 削平顕著 砥石・焙烙片出土

富岡古墳群³⁵⁾ 1基 径9m×高さ2m 2段築成、古墳再利用、石碑4

各塚の年代・性格については約5基が明らかになっている。

出羽三山供養塚 御塚台遺跡・江戸後期

馬ノ口遺跡・江戸後期

城ノ台遺跡・江戸後期

富岡古墳群・江戸後期？

浅間塚 有吉城跡11地点・江戸後期

この他、有吉城跡8地点①などは、石塔こそ遺存しないもののその形状から出羽三山塚としてよいであろう。とすると、塚内で検出された土坑墓は行人墓であろうか。一方、遺存状況が良いにも関わらず、高沢古墳群の①、椎名崎古墳群B支群のように性格不明のものもある。後者は何れも銭貨それも寛永以前の宋銭、明銭であるから近世でも初めの所産であろうか。

6 まとめ

(1) 中世

中世のおゆみ野は多分に縄文時代や古墳時代との比較になるだろうが、既述したように僅かな遺跡数と希少な散布地が確認されるというあり方である。これを単純に中世という時代は過疎地であったというように理解するのは問題だが、それを考える基本的な調査成果が公になったという点に大きな意義があることは言うまでもない。少なくともこの台地上に中世の人々の痕跡は限られたものであったということは確かである。ではそれはいかなる理由によるものであったのか。

中世における遺跡の立地は大きく二つにわけられる。有吉北貝塚・有吉城など赤塚支谷、泉支谷に挟まれた台地上それも中程から奥地にかけての地域と、伯父名台・椎名神社裏の椎名支谷の出口に面する地域である。両者共にその始まりは13世紀代に求められ、14世紀～15世紀代が中心となる。そして16世紀にはほぼ終息（有吉北貝塚）するか性格を変えその一角（伯父名台遺跡西側）に収斂するようである。その一方で、有吉城では15世紀後半以降から遺物が見出され、16世紀代には集落も形成されたものと推測する。この動きが近世村落（有吉村）へ繋がったのであろう。

では、椎名・金沢支谷ではどうか。伯父名台のあり方がその周囲まで規定できるかどうかについては否定的で、むしろ現在の集落：椎名崎・刈田子と同じ場所、つまり台地の根に集落を移した結果と推測する。その結果、背後の山が墓域と化したのであろう。金沢（大金沢、小金沢）も基本的に同じ流れで、現集落の背後ないしその周囲に中世の遺跡が形成されたが、そこは開発区域に入っていないだけの話（調査がなされていない）で、本来はあったものがその後現集落地（富岡、茂呂も含め）へと落ち着いたものと推測する。ただこちらは丘陵性の地形なので、多分に現在の屋敷地と被

っている可能性はあろう。つまり、単に集落部分が開発範囲に入らなかっただけの話と理解する。その意味で、金沢支谷は両集落の生産基盤であったろう。

一つ注目されるのは、城ノ台遺跡のように伯父名台遺跡と似た立地で周囲に可耕地が広がっている（伯父名台に近接してもいない）ケースであるが、そこで全面的調査ではないにしろ中世の遺構が検出されなかったことである。その先の南生実の台地先端では16世紀代に城郭が造られていることからして、台地上に中世集落が営まれた可能性は高いであろう。耕地の分布とも併せ適度な距離を置いて集村の形成がなされた時期、それが16世紀代にあったことを示唆する。同じく海岸平野に面して占地する近辺の生実城跡³⁶⁾・中野台遺跡³⁷⁾、菊間手永遺跡³⁸⁾などもその流れのなかで理解されよう。しかし、大膳野、六通、鎌取には広大な野原が広がっており、その開発は近世を待たねばならない。

(2) 近世

近世のおゆみ野は南生実村、有吉村、辺田村、駒崎村・谷津村・刈田子村（椎名下郷）、富岡村・大金沢村・小金沢村（椎名上郷）に属するかその新田ないし秣場などであった。検出された遺構・遺物は既述した通りであるが、それがこの地域の近世の歴史のなかでどう位置付けられるのか考えてみたい。

当然ではあるが、近世の集落跡は有吉城跡のみ、それもその外縁部の一部が明らかになったにすぎない。それでも中世から継続するかたちで近世の集落が営まれ、しかも同一の場所に近代まで続いていたことは確かである。この赤塚・泉両支谷ではその出口に当たる南生実集落を除いて近世集落は形成されなかったもので、この両支谷を経済基盤とする集落であったといえる。周辺の台地上は山林、畑が混在し、初期には新畑の経営などに当たり、害獣除けの溝が設けられたが、次第に安定するに伴い、単なる溝に変わったようである。集落から離れた高沢や大木戸は秣場として活用されたが、そこには牧に由来する地名と土手及び規模の大きな害獣除け³⁹⁾の溝が検出されている。官牧と異なる民間の牧が恐らく中世の伝統を受け継ぐかたちで行われた可能性を指摘したい。佐倉牧では毎年の捕馬の多くは周辺の村々に売り渡されたが、それは房州の嶺岡牧でも同じで、上総一円に及んでいたわけではない⁴⁰⁾。土気越智町にみられる野間土手と捕込の存在⁴¹⁾は、上総における牧の存在を如実に示しているが、このような民牧の研究実績はないに等しい。

一方、椎名支谷では有吉集落のように谷を遡った近世集落は存在しない。しかしこれは椎名支谷では谷の出口に椎名下郷（駒崎・刈田子・谷津）の集落が集中しており、その前面の海岸平野が耕地となったことに加え、背後の谷そのものが狭いという条件もあろう。古墳時代の人形塚を始めとした古墳群の成立はこれら平野に面する集落の墓域とみるべきで、その関係は近代にも受け継がれたと推測する。

その南の金沢支谷では大金沢、小金沢両集落が谷の出口手前に立地するも、海岸平野に面しているわけではなく、その経済基盤はこの谷にあった。谷の規模は赤塚・泉両支谷にほぼ匹敵し、有吉集落に対応する集落がこの金沢両集落であるといえる。両集落周辺は絵図⁴²⁾でみる限り有吉集落よりも畑地が多く、それは既述した調査成果とも連動するものであったろう。谷奥には大膳野・大木戸の秣場があった。

新畑や秣場また杉山（松山が多かったようである）への往復のために多くの道が作られた⁴³⁾が、とりわけ六通や鎌取新田が台地上に誕生するに及んで、幹線となる道路網が成立ないし改修され、これが近代の主要道となった。区画整理前の景観はこの近世それも中期以降に形成されたと言えそうである。

信仰の所産である塚については決して多いとは言えず、しかも各村の講中（個人の場合もあるようだが）による出羽三山供養塚⁴⁴⁾に収斂している状況さえ窺える。これは上総それも千葉南部から市原地域に顕著な現象で、当地はその北寄りの様相を示すものと要約できよう。

最後に中・近世遺跡調査（着手後に判明したという点も含め）の教訓として自戒も含め強調しておきたいのは、調査が終わってのちに絵図や関連資料に当たっても遅いということである。事前にそういう情報や地元への聞き取りを行い、然るべき対策を講じることが肝要である。なぜなら史料のある時代はより具体的に考古学の特性を生かすことが出来るのだから。

註

- 1 御塚台遺跡や高沢古墳群で中世の遺物を伴う溝（御塚台362B-4、高沢2号溝）があるが、近世初めの遺構への混入かと思われる。
- 2 赤塚支谷の鎌取場台遺跡や金沢支谷の大膳野北遺跡である。
- 3 文献6
- 4 該当する部分の最後の調査は筆者が担当したが、調査終了後の踏査で採集。
- 5 文献5

- 6 文献3・9
- 7 文献13
- 8 文献10
- 9 文献8
- 10 寛延4年「椎名上郷絵図」『千葉市史史料編4 近世』
- 11 篠崎四郎 1943 『房総金石文の研究』
- 12 文献7
- 13 文禄4（1595）年の注記があるが、絵図自体は後の作成になるものであろう（『絵による図でよむ千葉市図誌 上巻』）。
- 14 寛永5年「下総国小弓領郷帳」『千葉市史史料編3 近世』
- 15 天保13年「下総国千葉郡有吉村宗門御改帳」『千葉市史史料編3 近世』
- 16 文献6
- 17 「有吉村字訳絵図」(『絵による図でよむ千葉市図誌 上巻』)
- 18 馬ノ口遺跡は既報告であり、18条の溝や土坑群の存在が知られるものの、その詳細は不明で、「牧」との関係が具体的に追えるわけではない。木戸作については大字椎名崎の木戸作と混同するむきもあろうが、こちらは大字有吉の木戸作である。
- 19 文献12
- 20 寛延4年「大金沢村絵図」(『絵による図でよむ千葉市図誌 上巻』)
- 21 天保7年「椎名下郷見取絵図」(『絵による図でよむ千葉市図誌 上巻』)
- 22 文献1
- 23 「六通新田・殿堀新田明細帳」(『千葉市史史料編4 近世』)、なお、当座は無年貢ながら、蕎麦若干を年貢としたという。
- 24 文献2
- 25 文献16
- 26 文献3
- 27 文献4
- 28 文献7
- 29 文献10
- 30 文献14
- 31 文献9
- 32 文献9
- 33 文献15
- 34 文献12
- 35 文献8
- 36 生実城跡では城館との関係は明確ではないが、15世紀代を中心とする中世の遺構群が稠密に検出されている。築瀬裕一ほか 2000・2002 『千葉市生実城跡』(財)千葉市埋蔵文化財センター
- 37 伯父名台遺跡と類似する内容ながら、こちらは確実に16世紀代まで継続する。白井久美子ほか 2006 『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡(4)』(財)千葉県教育振興財団
- 38 台地端で墓跡を主とする15世紀代の遺構群が検出されている。近藤敏 1987 『菊間手永遺跡』(財)市原市文化財センター
- 39 いわゆる野馬土手は野馬を囲い込みその保護・育成を計ると共に、隣接する耕地の保護も兼ねていた。前者の場合の害獣とは主に当歳馬を狙う野犬(時として飼い犬も)であり、そのため犬落穴が土手に付随して要所に作られた。とはいえ、野犬退治は多く鉄砲によるもので穴での捕獲数は少ない(「鳥田家文書」『酒々井町史史料集(三)』)
- 40 嶺岡牧でも遠くから馬を買い付けたのはせいぜい君津・富

津市域であり（「永井家文書」『鴨川市史史料編（一）』）、上総でも市原～長生地域が問題となろう。一つにはそれを馬喰が担ったとみることも出来るが、不明な点が多い。

- 41 この点、寛文6（1666）年の大木戸村・越智村野境争論絵図（『絵による図でよむ千葉市図誌 上巻』）を参照されたい。
- 42 明治2年「小弓藩領分地廻り村々絵図」（『千葉市史史料編 3 近世』）
- 43 個別報告ではふれなかったが、春日作遺跡（文献11）の場合（痩せ尾根丘陵の尾根道）は明確に道として報告された例であり、これは絵図によっても確認される。
- 44 3段築成で5類の立地パターンの存在などが既に指摘されている（「出羽三山信仰」『市原市史 中巻』）。

文献

- 1 田坂浩・白井久美子 1979 『千葉東南部ニュータウン8－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－』（財）千葉県文化財センター
- 2 郷田良一・栗田則久 1980 『千葉東南部ニュータウン9－六通遺跡・御塚台遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 3 大野康雄 1984・2002 『千葉東南部ニュータウン15－馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 4 関口達彦ほか 1990 『千葉東南部ニュータウン17－高沢遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 5 上守秀明・出口雅人 1993 『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 6 岸本雅人ほか 1998 『千葉東南部ニュータウン20－千葉市有吉北貝塚（2）－』（財）千葉県文化財センター
- 7 関口達彦ほか 1999 『千葉東南部ニュータウン21－千葉市有吉遺跡（第4次）・高沢古墳群－』（財）千葉県文化財センター
- 8 加藤正信・蜂屋孝之 2002 『千葉東南部ニュータウン24－千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群－』（財）千葉県文化財センター
- 9 加藤修司・西野雅人・渡邊高弘 2002 『千葉東南部ニュータウン25－千葉市有吉城跡1（縄文時代以降）－』（財）千葉県文化財センター
- 10 加藤正信・蜂屋孝之・西野雅人ほか 2002 『千葉東南部ニュータウン26－千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 11 蜂屋孝之ほか 2002 『千葉東南部ニュータウン27－千葉市春日作遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 12 関口達彦ほか 2004 『千葉東南部ニュータウン28－千葉市今台遺跡－』（財）千葉県文化財センター
- 13 関口達彦ほか 2004 『千葉東南部ニュータウン30－千葉市伯父名台遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 14 関口達彦ほか 2006 『千葉東南部ニュータウン34－千葉市城ノ台遺跡－』（財）千葉県教育振興財団
- 15 関口達彦ほか 2006 『千葉東南部ニュータウン35－千葉市椎名崎古墳群B支群－』（財）千葉県文化財センター
- 16 岡田誠三・西野雅人ほか 2007 『千葉東南部ニュータウン38－千葉市神明社裏遺跡2－』（財）千葉県教育振興財団